

# ムラサキウスモンヤガ

チョウ目ヤガ科

*Cerastis leucographa*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類（VU）

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 33～35mm。前翅は紫色をおびた褐色で、白く縁どられた環状紋と腎状紋が目立つ。成虫は年1化、4～5月の早春に得られるが、稀な種である。食草は国内では未知であるが、海外ではオオバコ科、バラ科、ヤナギ科、ブナ科など多食性であることが知られている。

**分布** 国内では、北海道と本州の中部地方に分布。県内では、八ヶ岳山麓に古い記録があるのみ。

**生息環境** 詳細は不明であるが、高原の疎林環境を好むと思われる。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では、北杜市清里で採れた古い記録があるだけである。羽化時期が早春なので、得難いと考えられる。八ヶ岳山麓の清里付近を丹念に探せば再発見の可能性はあると思う。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 岸田泰則

# キハダカノコ

チョウ目ヒトリガ科

*Amata germana germana*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧（NT）

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 30～37mm。カノコガに似るが、腹部は黄色と黒色の縞模様なので容易に区別できる。成虫は年1化、7～8月に出現する。昼に活動し、各種の花に吸蜜に訪れる。食草はクルミ科のオニグルミ、スイカズラ科のハコネウツギ、キク科のシロタエギクなどが知られる。

**分布** 本州、四国、九州、対馬。県内では、富士山麓や八ヶ岳山麓、甲府盆地に記録がある。

**生息環境** 低地から山地（標高 1000 m 程度）の草地に生息する。高標高地には分布しない。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では、富士山麓の草原や、釜無川の河川敷、北杜市清里などで採集されているが、産地は局所的である。開発により生息域が狭められている。レッドデータブックは、長野県（NT）、新潟県（NT）、宮崎県（NT）が指定している。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# ルリハダホソクロバ

チョウ目マダラガ科

*Rhagades pruni esmeralda*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧（NT）

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧（NT）

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 17～22mm。前翅は黒色で半透明。紺色の光沢を持つ。成虫は年1化7～8月に出現し、昼間活動する。食樹はバラ科のズミ。

**分布** 本州、九州、対馬。県内では、富士山麓や八ヶ岳山麓で記録されている。

**生息環境** 火山性草原・河川敷などの、ズミが点在する明るい草原に生息する。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では、北杜市清里や富士山麓などの草原で得られているが、草原の環境悪化により、個体数が減っている。レッドデータブックは、秋田県（DD）が指定している。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# タケウチエダシヤク チョウ目シヤクガ科

*Biston takeuchii*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 ♂ 62～71mm、♀ 76～80mm。翅の地色は桃灰色。前翅の基部と翅頂部付近に白色鱗がある。二本の黒色帯は明瞭。♀は♂より大きく、腹部も太い。成虫は年1化、4月に出現する。幼虫は、ヤマモモ科のヤマモモ、ブナ科のウラジロガシ、ヤナギ科のシダレヤナギで飼育できることが知られており、野外では多食性であると考えられている。

**分布** 国内では、本州、四国、九州に分布するが、産地は局所的である。

**生息環境** 低地の雑木林。開発などによる雑木林の伐採で、生息地が狭められている。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では、北杜市日野春、旧明野村、甲州市などで得られているが、希な種である。レッドデータブックは、東京都 (EX)、高知県 (NT) が指定している。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# ヒメスズメ チョウ目スズメガ科

*Deilephila askoldensis*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 50mm内外。前後翅は赤みを帯びた褐色。前翅の基部付近と中央に暗色の帯がある。前後翅の外縁は弱い鋸歯状になる。成虫は年1化、6～9月に出現する。食草はアカネ科のカワラマツバ、キバナカワラマツバが知られている。

**分布** 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布。県内では、八ヶ岳・富士山の山麓で記録されている。

**生息環境** 火山性草原や河川敷の草地。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では、北杜市清里や、富士山周辺の草原に生息するが、草原の環境悪化により、個体数が減っている。レッドデータブックは、長野県 (NT)、岡山県 (NT)、香川県 (VU)、宮崎県 (NT) が指定している。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# ギンボシシャチホコ チョウ目シャチホコガ科

*Rosama cinnamomea*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 28～29mm。前翅の地色は橙褐色で、♀は♂より色が濃い。前翅に目立つ黒色の丸紋がある。後縁は強くえぐられる。成虫は年2化、6～7月と8～9月に出現する。食草はマメ科のヌスビトハギ。

**分布** 国内では、北海道、本州、四国、九州、対馬、屋久島に分布。県内では、北西部などに記録がある。

**生息環境** 明るい林で得られているが、どのような環境を好むかは良くわかっていない。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では旧明野村などで採集されているが、個体数は非常に少ない。雑木林の伐採が影響している可能性が高い。レッドデータブックは、秋田県 (VU)、長野県 (NT) が指定している。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# ウスズミケンモン チョウ目ヤガ科

*Acrionicta (Hylonycta) carbonaria*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 45～50mm。前翅の地色は灰褐色で、各横線はやや不明瞭。後翅は純白色。成虫は年2化、4～5月と7～8月に出現する。食樹はブナ科のクヌギが知られている。

**分布** 国内では、本州、四国、九州に局地的に分布。県内では、県北西部などに記録がある。

**生息環境** クヌギやコナラが生える雑木林。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では、北杜市日野春などで得られていたが、宅地化や畑地などの開発や、雑木林の伐採により生息地が狭められ個体数が減少している。レッドデータブックは、環境省 (NT) が指定している。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# ホシヒメセダカモクメ チョウ目ヤガ科

*Cucullia fraudatrix*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 33～38mm。他の *Cucullia* 属の種より小型。前翅の地色は灰白色、内横線は明瞭で前縁から斜めに伸びる。外縁付近に目立つ黒条を有する。成虫は年1化、8～9月に出現する。食草はキク科のヨモギ、オオヨモギが知られる。

**分布** 国内では、北海道、本州 (中部) に分布する。県内では、八ヶ岳山麓に記録がある。

**生息環境** 高原や河川敷など、ヨモギが繁茂している場所に生息する。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では、北杜市大泉町や清里などから知られているが、草原の環境悪化により、生息地が減っている。レッドデータブックは、環境省 (NT)、長野県 (DD) が指定している。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# ミスジキリガ チョウ目ヤガ科

*Jodia sericea*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 32～35mm。前翅は明るい橙色。各横線は褐色で、やや不明瞭。後翅は白色で、やや橙色を帯びる。成虫は年1化、晩秋に羽化する。成虫で越冬するので、汚損個体は4月でも採集されることがある。本種を得るには早春の糖蜜採集が有効である。食樹はブナ科のクヌギ、コナラ、カシワが知られている。

**分布** 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布。県内では、北西部の二次林で得られている。

**生息環境** 平地の雑木林に多い。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では、旧明野村、韮崎市、北杜市日野春などの二次林に生息している。雑木林の伐採や畑地の開発などの影響で生息地が狭められている。レッドデータブックは、環境省 (NT)、神奈川県 (NT)、長野県 (DD) が指定している。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# フジシロミヤクヨトウ

チョウ目ヤガ科

*Sideridis kitti*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 開張 36～42mm。前翅はやや光沢のある黒褐色。各横線と環状紋、腎状紋の縁は白色でよく目立つ。成虫は年1化、7月に出現する。食草はマメ科のムラサキモメンヅルが知られているが、ヨーロッパではソラマメ属、ゲンゲ属も記録がある。

**分布** 国内では、富士山以外の産地は知られていない。

**生息環境** 富士山の4～5合目付近のムラサキモメンヅルが生えている場所に生息する。

**生息状況及び危機要因** 富士山の山梨県側では、過去には多数の個体が得られていた。現在の状況については、十分な調査ができていないが、静岡県側では安定して記録されているので、山梨県側でも安定して生息していると考えられる。レッドデータブックは、環境省 (NT)、静岡県 (分布上注目種) が指定している。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# コハイイロヨトウ

チョウ目ヤガ科

*Hadena (Anepia) aberrans*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 29～34mm。前・後翅の地色は灰白色。前翅の中央は茶褐色。円形の環状紋は白色で明瞭。成虫は年1化、8～9月に出現する。食草はナデシコ科のフシグロが知られている。

**分布** 国内では、北海道、本州、四国、九州、対馬に分布。県内では、八ヶ岳山麓に記録がある。

**生息環境** 高原や河川敷などの草原。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では、北杜市清里・大泉町などで採集されているが、個体数は少ない。草原の環境悪化が減少の要因と考えられる。レッドデータブックは、秋田県 (EN)、長崎県 (EN) が指定している。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# ホンアオバヤガ

チョウ目ヤガ科

*Actebia praecox*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 40～44mm。前翅は明るい緑色で美しいヤガである。内横線と環状紋の間は離れている。後翅は暗色。成虫は年1化、6～8月に出現する。夏眠すると考えられ、汚損した個体は9月にも見られる。食草はマメ科のハマエンドウが知られるが、ヨーロッパでは各種の草本を食することが知られる。

**分布** 国内では、北海道、本州、四国、九州に分布。県内では、富士山や大菩薩に記録がある。

**生息環境** 平地から山地にかけて生息する。以前は、普通に得られていたが、最近では得難い種となっている。減少の原因は不明であるが、砂地や砂利地の環境悪化が要因かも知れない。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では、富士山五合目付近、甲州市焼山沢などで採集されているが、稀な種である。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# クシヒゲモンヤガ

チョウ目ヤガ科

*Lycophotia cissigma*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧（NT）

2005：山梨県カテゴリー  
なし

2017：環境省カテゴリー  
なし

**種の解説** 開張 38mm内外。前翅は茶褐色。亜外縁線、外横線は鋸歯状を呈する。環状紋・腎状紋は不明瞭。後翅は暗色。成虫は年1化、7月上旬に出現する。食草は未知であるが、ヨーロッパの近縁種はツツジ科のエリカやギョリュウモドキを食することが知られている。

**分布** 国内では、本州の中部地方に分布する。県内では、北西部から北部に記録がある。

**生息環境** 標高約 1000 m以上の高原。産地は局地的である。

**生息状況及び危機要因** 山梨県では、北杜市清里や旧牧丘町乙女高原などで得られているが、稀な種である。草原の環境悪化の影響が危惧される。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 岸田泰則

# アサマウスモンヤガ

チョウ目ヤガ科

*Xestia descripta*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧（NT）

2005：山梨県カテゴリー  
なし

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧（NT）

**種の解説** 開張は、♂♀ 35mm内外。全体に光沢をもったやや黒灰色を帯びた褐色の蛾で、内・外横線が良く発達している。成虫は年1化で6～7月に現れ、8月までみられる。草原に局所的に産する稀種。

**分布** 国内では長野県の浅間山、川上村、高ボッチ、霧ヶ峰高原を中心とした本州中部の一部地域に記録があり、長野県準絶滅危惧種、群馬県絶滅危惧Ⅱ類となっている。山梨県内では、国師岳と旧牧丘町乙女高原（未発表）の記録が知られるのみ。

**生息環境** 比較的標高の高い草原に局所的に産する稀種で、草原性の種ということはわかっているが、詳しい生態は不明。

**生息状況及び危機要因** 山梨県内では、国師岳と旧牧丘町乙女高原（未発表）の記録が知られるのみである。長野県では、局所的ではあるが浅間山から奥秩父山系、八ヶ岳にかけて記録が散在することから、山梨県内でも今後、奥秩父山系から八ヶ岳を経て南アルプスまでの広い範囲の亜高山帯の草原環境で記録される可能性がある。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 渡邊通人

# フサヒゲルリカミキリ

コウチュウ目 カミキリ目科

*Agapanthia japonica*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅 (EX)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2005：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

**種の解説** 体長 15～17mmで、体は黒色～紫藍色。上翅は無紋で紫藍色～緑藍色の金属光沢を持つ。触角は12節で第1節から第3節端部にふさ状の長毛の束を有する。成虫は、ユウスゲやノハナショウブの葉や花茎を後食し、幼虫もこれらの植物の茎を食すると思われる。成虫は年1回6月下旬から7月上旬に出現し、生息地ではユウスゲやノハナショウブを後食する姿や、草原上を低く飛ぶ姿が見られる。

**分布** 北海道西南部、本州（関東北部、中部地方、中国地方）に局地的に分布する。日本特産種。大陸には近縁の別種が分布する。伯耆大山の榎水原はかつて本種の多産地として有名であったが、開発されてホテルが建ち絶滅したようだ。長野県を含む他の生息地も開発により、絶滅または絶滅寸前の所が多く、現在残っているのはおそらく岡山県の一地方のみ、本邦では最も絶滅が危惧されているカミキリ目科の一つであろう。県内では、みずがき山麓に古い記録（1952年）があるのみである。

**生息環境** ユウスゲが生育する高原の草地に生息する。日本ではこのような環境は元々少なく、元来それほど個体数が多いカミキリ目科ではなかったと思われる。

**生息状況及び危機要因** 県内では現在、生息が確認されている場所は知られていない。最近まで確認されていた長野県の霧ヶ峰周辺でも絶滅したと考えられており、県内でも生息している場所がないとはいえないが、その可能性は非常に低いと判断され、今回絶滅種に指定した。

**特記事項** 平成28年に環境省の種の保存法による国内希少野生動物植物種に指定され、採集や標本の販売・移動等が禁止されている。

執筆者 池田清彦

# オオヒラタツクリゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科

*Oodes virens*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体形はゲンゴロウに似て紡錘型で、♂は黒光りし、♀はやや艶消しになる。詳しい生態は分かっていない。

**分布** 国内では関東地方以南に分布するが、どこの地方も近年記録がほとんど得られていない。山梨県では1990年代から現在まで10頭前後が得られているに過ぎない。韮崎市・北杜市の一部で記録され、最近記録されたのは2005年に採集された1♂1♀である。

**生息環境** 北杜市の例では、河川に囲まれた扇状地にある灯火に飛来し、付近の物陰に隠れている場合が多かった。珍しい事例では、蜘蛛の巣に引っ掛かかった個体を見ているので、飛翔することは間違いない。

**生息状況及び危機要因** 最近記録されない理由は、コンビニエンスストア・ガソリンスタンド・ファミリーレストランなど深夜営業する店舗が増え、この昆虫が分散し他の動物などに捕食されている可能性があるためと考えられる。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 藤森克彦

# カワラハンミョウ

コウチュウ目 ハンミョウ科

*Chaetodera laetescripta*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長 14～17mmのハンミョウの仲間。背面は緑銅色で、上翅の紋は良く発達するが変化に富み、白色部の面積も地域変異・個体変異が多いという。成虫は夏に発生し、河川敷の砂礫地を歩行している個体が多くみられる。詳しい生態（特に河川域の個体群）は良くわかっていない。

**分布** 国内では、北海道、本州、四国、九州、伊豆大島に分布。近年、河川敷の産地は全国的に激減しており、砂浜海岸には産地の残っている所もあるが、ここでも生息地は分断傾向にあるという。

**生息環境** 砂質の河川敷や砂浜海岸に続く砂丘が生息環境で、県内では砂質からやや礫の混ざった河川敷で確認された。幼虫は、イネ科などの草の点在する周囲に巣孔を掘って生息しているといわれている。県内で確認された主な環境は、比較的大きな河川の河川敷で砂地や砂地に小さな礫が混ざる場所であった。

**生息状況及び危機要因** 県内での記録は、国土交通省甲府河川国道事務所が実施した調査で2011年に初めて河川敷から記録され、その後3年間は甲州昆虫同好会や甲府河川国道事務所等の調査で記録が得られたが、その後記録が途絶えている。生息環境自体が特殊で、年変動や季節変動が激しい環境である。それを考慮した対策が必要であろう。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

# オニホソコバナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2017：環境省カテゴリー  
なし

*Necydalis (Necydalis) gigantea gigantea*

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 体長 17～37mm。体は黒色で腹部は基部が黄褐色。前胸は黒色でつやがあり、外縁に金色の尾毛を密生する。上翅は赤褐色で短く、後翅は折りたたまれずに露出する。アシナガバチやヒメバチに擬態しているものと思われる。主として山里の古い桑畑に見られるが、自然林でも採集されている。幼虫はクワやケヤキの老木のコルク化した部分を食する。

**分布** 日本特産で、北海道、本州、四国、九州に局所的に産する。屋久島には別亜種が分布する。県内では須玉町黒森、南アルプス夜叉神峠に記録がある。

**生息環境** 老木が立ち並ぶ山地の桑畑やケヤキの大木がある神社の境内などが主な生息環境であるが、食樹となる衰弱部分を持つ大木があれば自然林にも生息する。

**生息状況及び危機要因** 県内ではかつて須玉町黒森近辺に多産したが、食樹のクワが伐採されたため、最近ではほとんどみられなくなった。夜叉神峠で記録があることから、県内の自然林には少ないながらも分布すると思われるが、詳しい調査はない。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 池田清彦

# オオチャイロハナムグリ

コウチュウ目 コガネムシ科

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

*Osmoderma opicum*

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 大型のハナムグリ。全身茶褐色～黒褐色で、弱い青～紫の金属光沢がある。体長 22～36mm。前胸背板は肩部よりかなり幅が狭く、中央に1対の縦隆起がある。ジャコウ臭がある。

**分布** 本州以南に生息する。県内では、富士山麓、南アルプス、御坂山地、秩父山地で見つっている。

**生息環境** 成虫は樹洞に潜み、幼虫も樹洞内の腐朽材の堆積中で育つ。このため樹洞を有するような老齢林が失われると種の維持が難しくなる。山地帯から亜高山帯で見られる。

**生息状況及び危機要因** 樹洞生息性のため人目につかず、生息状況は十分把握されていない。老齢天然林の伐採とともに個体数が減少したものと推測される。

**特記事項** 定性的要件②

執筆者 大澤正嗣

# ダイコクコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧 II 類 (VU)

*Copris ochus*

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 大型で横幅、厚みあり。黒色で光沢は弱い。体長 16～34mm。雄は、頭部に大きな分岐しない角があり、前胸背板には一対の突起、そしてさらにその外側に一対の小突起を持つ。しかし、小型の雄ではこれらの特徴が発達せず、角も小さい。一方、雌では頭部の突起は板状隆起、前胸背板の突起は横隆条の段階で留まる。ただし雌雄共に脚は太く、特に前脚の脛節は幅広く発達している。夜行性。

**分布** 北海道、本州、九州、四国、一部島嶼に分布。山梨県では富士河口湖町富士ヶ嶺地区に記録がある。

**生息環境** 放牧地に生息し、成虫は牛等の新鮮な糞を食する。幼虫は地下で成虫の作った糞球を食べて成長する。

**生息状況及び危機要因** 山梨県を含め、全国的に少ない。放牧地の減少とともに生息地が狭められ、個体数も激減したと考えられる。

**特記事項** 定性的要件②

執筆者 大澤正嗣

# クロゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

*Cybister brevis*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長 20～25mm、体形は卵形。背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で光沢がある。上翅には 3 条の点刻列を有し、翅端前方には小さな黄褐色紋をそなえるが、個体によっては不明瞭になる。水生植物の生育する池沼、放棄水田、水路などに生息し、成虫で越冬する。

**分布** 本州、四国、九州に分布する。本県では、北杜市長坂町で記録されている。

**生息環境** 本県では、2012 年 9 月に八ヶ岳山麓に点在する溜池群で、別々の日に 1 ♂ 1 ♀ 記録された。現地はゲンゴロウなども見られる自然環境豊かな溜池で、捕食の対象となる小魚や水棲昆虫も多い、また、水辺には産卵に適した水生植物も多い環境である。本種を求めて、その後何度か現地を訪れているが、追加の記録は得られていない。もともと個体数が多くないと思われ、今後の継続した調査が必要である。

## 生息状況及び危機要因

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 杉村健一

# ヌバタマノクロアトキリゴミムシ

コウチュウ目オサムシ科

*Setolebia nubatama*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長 7.5～8.4mm、体は光沢のある黒色。和名のヌバタマは黒や夜に冠せらせる枕言葉。つまり、この昆虫は和名に枕言葉をもつという、他に例を見ない特異な種である。しかし、本種の特異性はそれだけではない。山梨県北部の奥秩父地域と、そこから北に伸びて軽井沢に達する関東山地の西南地域は、日本列島における大陸系動植物の孤立的遺存地帯として重要な地域であるが（日本では、ここだけにしか見られない大陸系要素が少なくない）、本種はその代表的遺存種であり、同時に山梨県の生物相を特色づける重要種の一つに数えられるという点である。

**分布** 現在までの産地は、山梨県北杜市の金山地区のみ。筆者による最初の発見が 1952 年。その後 1993 年に再発見され、1995 年にも採集されているが、確認地点はすべて金山地区。ここ以外には日本のどこからも記録がない。

**生息環境** 野生のナシが自生する半草原的環境。

**生息状況及び危機要因** 山梨県北部の金峰山・瑞牆山の南麓には、ヤマナシやアオナシなどの野生のナシが自生する。こうした野生ナシ（特にアオナシ）は、ヤマトヨダンハムシ（一名ヤマナシハムシ）という甲虫の食樹であり、このハムシは成虫・幼虫ともその葉上で生活する。そして、ヌバタマノクロアトキリゴミムシは、こうした環境でヨダンハムシの幼虫などを餌にして生活しているようである。この種が新種として記載されるとき、そのタイプ標本として用いられた個体（♂2頭）は、筆者が金山峠でアオナシの枝を叩いたとき、ヨダンハムシの幼虫と一緒に受け網に落ちてきたものであり、松本慶一・豊田浩二は、同じ金山地区でヌバタマを採集したとき、ヨダンハムシの幼虫と一緒にスクリー管に入れておいたところ、その幼虫をヌバタマが捕食したことを報じているからである。したがって本種の生息には、野生ナシが自生していること、餌となるヨダンハムシがそのナシに生息していること、この二つの条件が重要ということになる。ところが日本ではこのヨダンハムシもまた大陸系遺存種で、山梨県の金山地区から八ヶ岳山麓の地域と、そこから遠くない長野・群馬の一部に知られているだけである。餌昆虫のヨダンハムシとヌバタマの分布が重なるとすれば、ヌバタマの新産地は、将来上記のようなヨダンハムシの生息地で発見されるかもしれない。しかし、ゴミムシをターゲットとする研究者が増え、日本各地の調査が進んでいるにもかかわらず、現在のところ金山地区以外に新産地は追加されていない。想定される分布域が極めて狭いこと、そこに生き残っている個体数もまた極めて少ないと推定されること、そしてさらに、今日唯一の産地である金山地区の環境も変容し、野生ナシが減少していること、これらの状況を勘案すると、本種の生存は深刻な危機状態にあるといつてよいであろう。

**特記事項** 定性的要件⑤

執筆者 大野正男



# オオクワガタ

コウチュウ目 クワガタムシ科

*Dorcus hopei binodulosus*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧 II類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 大型のクワガタムシで、体長 22～77mm、雄の大あごは湾曲が強く、1対の内歯と1対の小歯(小型個体では消失)を持つ。体は黒色。幅広だが扁平で足が短く、樹洞に住むのに適している。幼虫は1～2年で成虫となり、成虫越冬し数年間生きる。

**分布** 北海道から九州まで日本に広く分布するが個体数は少ない。県内にも広く分布しているが、ある程度の個体数がみられるのは、山梨市、笛吹市、甲府市、甲斐市、韮崎市、北杜市の低山帯である。

**生息環境** 台場クスギと呼ばれる、2mぐらいの高さから萌芽更新させたクスギの林で個体数が多い。サクラやヤナギでもしばしば生息が確認されている。昼間は樹洞に潜み、夜間樹液に集まる。幼虫は立ち枯れした広葉樹の白色腐朽部に生息する。

**生息状況及び危機要因** 高価で取引されたため、乱獲され、個体数が激減した。幼虫の生息場所である腐朽木が幼虫捕獲のために破壊されたり持ち去られたり、また、成虫の生息場所である樹洞が捕獲のため破壊されたりすることにより、生息場所そのものも減少した。また、台場クスギが放置され、更新されないことも個体数減少の原因と思われる。ただし、近年では本種への採集圧が一時期より低下している。

**特記事項** 定性的要件①②③

執筆者 大澤正嗣

# オオルリハムシ

コウチュウ目 ハムシ科

*Chrysolina virgata*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長 11～15mm。赤っぽい地に金緑色の縦筋がある美しいハムシである。太平洋側と日本海側で別種のごとく色合いが変わる。上記の個体群は太平洋側の系列に入るものである。日本海側の個体群は、金緑系または紺系を基本とするが、能登半島の個体群は、不思議なことに太平洋側の個体群と似ている。他にも様々なパターンが知られている。年に1回初夏から夏に出現する。

**分布** 本州のみに分布する。しかも、その分布は極めて局所的である。山梨県は、長い間空白地帯となっていたが、富士山北麓の2ヶ所で採集された(宮下泰典、未発表)。

**生息環境** これまで湿地及びそれに準ずる場所で生息が確認されている。ゴマ科のシロネ・ヒメシロネが生えているような半日陰の場所を好む。

**生息状況及び危機要因** 基本的に本種は湿地等に限って生息しているが、山梨県の場合は草原で見られる。そしてそこでは、ホストであるヒメシロネが鹿の食害を受けるといった状況になっている。生息環境ともども本種の存続が懸念される。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 宮下泰典

# ゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

*Cybister japonicus*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧 II類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 体長 34～42mm。体形は卵型で比較的扁平。背面は緑色あるいは褐色を帯びた暗褐色で強い光沢を帯びるが雌では弱い。雌は上翅に縦に多くのしわ状の細かい溝があるので光沢は鈍い。雄の前肢跗節は裏側が吸盤状になっている。交尾の時、雌につかまる為である。前胸と上翅両側の縁、頭部の一部と口器、脚は黄褐色または赤褐色となる。成虫、幼虫ともに肉食性で小魚、オタマジャクシや水生昆虫などを捕食する。灯火にも飛来する。成虫で越冬する。

**分布** 北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では北西部から記録がある。特に八ヶ岳山麓に点在する溜池では個体数も多い。記録されている産地は、八ヶ岳山麓、秩父山地、南アルプス前衛山地、市町村名で表すと北杜市の旧長坂町、旧大泉村、旧須玉町、旧白州町と韮崎市である。また、1990年代には、甲斐市の旧双葉町でも目撃している。

**生息環境** タガメと違い、ある程度の水深を必要とするようで水田より溜池を好む。特に冬は水中越冬するので池を利用する。捕食の対象となる小魚や水生昆虫が豊かな池沼に生息するが、水田や水路にも見られる。

**生息状況及び危機要因** 北杜市長坂町～大泉町の八ヶ岳山麓に点在する溜池では安定して発生している。溜池の水量や草刈りなどの作業も、各集落で管理されているので問題はないが、水中のオオクチバスやブルーギル等の外来種の影響が懸念される。また、よく探せば甲斐市などでも発生している可能性が高いのだが、こちらは開発が進み宅地化されている。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 杉村健一

# シマゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

*Prodaticus bowringii*

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長 12.5 ~ 14mm の中型のゲンゴロウの仲間。上翅は黒色で 2 対の縞模様の黄色帯があり、基部に黄色紋がある。

**分布** 国内では、北海道、本州、四国、九州、八丈島、トカラ列島に広く分布するが、北の方が少ない。山梨県内では、県北西部の溜め池地帯や都留市から富士吉田市にかけての桂川流域に記録がある。

**生息環境** 平地から丘陵の水草の豊富な浅い池沼、湿地、水田、耕作放棄水田等の止水域に生息する。

**生息状況及び危機要因** 過去には、県内の中山間地の里山水辺環境に広く分布していたと考えられるが、近年確認された記録は非常に少なくなっている。県北西部の溜め池地帯では辛うじて確認されているが、都留市や富士吉田市の産地からは最近記録されていないことから、全域的に環境が悪化し、個体数も急減していると判断される。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

# コガタガムシ

コウチュウ目 ガムシ科

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IB 類 (EN)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧 II 類 (VU)

*Hydrophilus bilineatus cashimirensis*

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 23 ~ 28mm、後胸突起は長く腹部第 4 節に達する。腹部は細毛におおわれる。ガムシより一回り以上小さく、やや細くシャープな印象を受ける。

**分布** 本州～南西諸島、南西諸島以外では分布が局地的で産地は限られる。本県では北杜市長坂町で記録されている。

**生息環境** 本種が生息しているのは、八ヶ岳山麓の溜池群である。しかも北杜市長坂町のみで確認され、個体数は多くない。南西諸島以外も産地も極限される傾向にある本種が、本県に生息する事自体驚きである。本種が生息する溜池は農業用であり、水量調節や草刈り等の管理が行われているので環境は安定している。ただ脅威なのはこの生息地にオオクチバス・ブルーギル等、外来魚の侵入することである。

**生息状況及び危機要因**

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 杉村健一

# ヨツボシカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 II 類 (VU)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧 IB 類 (EN)

*Stenygrinum quadrinotatum*

2005：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

**種の解説** 暗赤色で、上翅左右それぞれに黄白色の円紋が 2 つずつある。その 2 つが前後でつながることもある。体長 8 ~ 14mm。脚の腿節は肥大する。訪花性でクリの花などに集まる。

**分布** 北海道南部から九州まで見られる。県内広くに分布するが数は少ない。

**生息環境** 平地から低山帯に生息する。幼虫は、クリ、ナラ類、カシ類等の広葉樹を食樹とする。

**生息状況及び危機要因** 全国的に激減している。本県では、クリ園で見られるが、近年では稀。

**特記事項** 定性的要件①

執筆者 大澤正嗣

# アカムネハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

*Macropidonia ruficollis*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 緋色の前胸背版が目立つ。全体は黒色で微毛に覆われる。体長 11 ~ 16mm。

**分布** 本州中部と四国?に生息するが少ない。その中で、長野県川上村での捕獲、観察報告が目立つ。山梨県では北杜市高根町に採集記録がある。

**生息環境** 高原の草地や疎林に生育するクロツバラ上やその周囲で発見されている。

**生息状況及び危機要因** 全国的に大変少ない。ただ、山梨県と隣接する長野県側では捕獲記録があるため、山梨県側でも隣接地域等で生息している可能性がある。

**特記事項** 定性的要件①②④

執筆者 大澤正嗣

# アカマダラハナムグリ

コウチュウ目 コガネムシ科

*Poecilophilides rusticola*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー  
情報不足 (DD)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長 16 ~ 20mm。背面は赤褐色で、黒色の小紋が点在する。前胸腹板の中央には褐色の毛を持った突起がある。全体に丸味をおびて見える。成虫は、6~8月に見られ、クヌギの樹液に集まることが多い。

**分布** 本州、四国、九州に分布する。県内では、甲府盆地の北部低山地に分布する。

**生息環境** 低山地のアカマツ・コナラ・クヌギなどの混成林のやや明るい場所のクヌギの樹液に集まる習性がある。また、オオタカなどの猛禽類の巣に産卵するともいわれるが、他の猛禽類の巣からも確認されている。

**生息状況及び危機要因** 山梨県内では、昭和 30 年代には普通に見られたが、産地がだんだん少なくなり、平成になってからは韮崎市、旧敷島町などの甲府市北部山地及び笛吹市などから年に1頭位記録される程度である。土地造成などによる生息地の変化が要因と考えられる。

**特記事項** 定性的要件②

執筆者 瀬田 貴

# ガムシ

コウチュウ目 ガムシ科

*Hydrophilus acuminatus*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長 33 ~ 40mm、後胸突起は腹部第 2 節に達する。腹部は無毛。ゲンゴロウと並び大型の水生甲虫である。また、厚みは本種の方がまさるので、より大きく見える。ゲンゴロウと違い後脚がオール型になっておらず、交互に動かして移動する形をとるので、泳ぎは巧みではない。幼虫は肉食性だが、成虫になると雑食になる。主に水草や藻などの植物質を食す。

**分布** 北海道~南西諸島の日本全国に分布する。近年平地では、減少している。山梨県内での分布は県北西部を中心に生息している。市町村名では、北杜市旧長坂町、旧大泉村、旧須玉町、旧白州町などである。よく探せば他にも産地が見つかると思われる。

**生息環境** 本種の生息するところは植物の豊富な溜池や放棄水田などである。泳ぎが上手くないので流れのある水路などでは見かけない。

**生息状況及び危機要因** 本県では農業用の溜池が主な生息地になっている。八ヶ岳山麓の溜池群や秩父山地の溜池、南アルプス前衛山地の溜池等で良く見られる。ゲンゴロウよりも個体数が多く安定して発生している。

**特記事項** 定性的要件②

執筆者 杉村健一

# オオアオカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

*Chloridolum (Chloridolum) thaliodes*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 体長 22～31mm。頭部と上翅は金緑～黒緑色。前胸中央前方に小さな1対の隆起がある。触角及び足は青紫色。触角は雄では体長の2倍を超える。成虫は、盛夏に出現し、特にサワグルミの伐採木の下面に見られることが多く、夕刻に伐採地の上を低く飛ぶこともある。また、ノリウツギの花から得られることもある。寄主植物としては、サワグルミ(クミ科)、ヤナギ類・ドロノキ(ヤナギ科)・ハルニレ(ニレ科)などが知られている。卵はサワグルミの太い幹の樹皮の裂け目に1～2卵ずつ産み、幼虫で2冬をすごし、3年目の夏成虫になるといわれている。

**分布** 北海道、本州(暖帯上部～温帯)、四国、九州、対馬、隠岐に分布。山梨県内では、大菩薩山系東部から御坂山系、早川渓谷などに記録がある。

**生息環境** 標高 700～1500m の温帯上部、主要寄主植物であるサワグルミの大木が生育する沢筋などを主な生息環境とする。

**生息状況及び危機要因** 山梨県内では大月市小金沢に記録が多いが、他にも旧下部町椿草里・塩ノ沢・湯之奥林道、芦川渓谷、早川渓谷などに記録がある。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 瀬田 貴

# ケブカマルクビカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

*Atimia okayamensis*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 体は光沢のある黒色であるが、灰～黄灰色の毛が密生する。上翅には多数の無毛の円紋が縦に複数列並び、しばしば縦方向に連絡する。体長 5.5～8.5mm。触角と脚は太く短い。

**分布** 関東以西の本州と四国に分布する。県内では富士河口湖町、甲府市、韮崎市で見つかっている。

**生息環境** ネズが宿主であり、成虫は葉を、幼虫は材部を食する。このため、ネズの生育する2次林等が生息地となっている。

**生息状況及び危機要因** 個体数はかなり少ないと思われるが、目立たないカミキリムシのため、生息状況等ははっきりしたことは分かっていない。

**特記事項** 定性的要件 a) c)

執筆者 大澤正嗣

# キベリカタビロハナカミキリ

コウチュウ目カミキリムシ科

*Pachyta erebia erebia*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 体長 14～22mm。体は黒色。上翅の色彩は、ほぼ濁黄色なもの、暗褐色なもの、黒地で側部に黄～黄褐色の縦筋が入るもの、その縦筋が中へ広がるものなどがある。成虫は、7月下旬から出現し花に好んで集まり、伐採木や新しい立ち枯れに飛来することもある。

**分布** 本州中部山地と九州熊本県椎矢峠が知られる。山梨県内では、大菩薩、将監峠、南アルプス二軒小屋、八紘嶺、三ツ峠などが知られている。

**生息環境** 成虫は稀に初夏、多くは盛夏の頃に出現し、ノリウツギ、リョウブ、ミヤマイボタ、シシウドの花に好んで集まる。また、ツガ、カラマツ、トウヒ、オオシラビソなどが知られている。

**生息状況及び危機要因** 山梨県内での産地は広範であるが、いずれの地も個体数は多くはない。全国分布の中で、本州中部山地が主産地である。特に山梨県内はその中心であり、多くの採集者が訪れる。どこにでもいるという種ではないので、採集圧が高まると、どうしても個体数は少なくなる。加えて植林による環境の変化は、個体数減少の、かなり重要な要因と考えられる。

**特記事項** 定性的要件 a) b) c)

執筆者 瀬田 貴

# トラフカミキリ

コウチュウ目カミキリムシ科

*Xylotrechus chinensis chinensis*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

**種の解説** 前胸背板と上翅には黄色地に黒色系、赤褐色系の独特のしま模様が入り、蜂擬態と考えられている。体長 15～26mm。前胸背板は大きく、丸みを帯びる。触角は短い。

**分布** 北海道から九州、沖縄まで生息するが、数は少ない。山梨県でも見ることが稀になった。

**生息環境** 食樹はクワであることから、桑畑の残る低地から低山帯で見られる。幼虫はクワの樹幹内で育ち、古いクワの存在が重要と考えられている。

**生息状況及び危機要因** 養蚕業の衰退で桑畑が減少し、本カミキリの生息地が激減した。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 大澤正嗣

# ヒゲナガゴマフカミキリ

コウチュウ目カミキリムシ科

*Palimna liturata*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

**種の解説** 体は黒色で、灰白色から黄灰色の微毛の地に黒色の微毛部分が複雑に入り模様を作る。体長 11～24mm。触角が長く特に雄で顕著である。触角、脚とも白色と黒色が交互に入る。

**分布** 北海道から九州まで分布する。県内では、北杜市、韮崎市、笛吹市、山梨市、大月市、都留市、富士河口湖町で記録がある。

**生息環境** ブナの枯木や伐採木で見られる。

**生息状況及び危機要因** 近年、山梨県を含め全国的に数が減少した。

**特記事項** 定性的要件 a)

執筆者 大澤正嗣

# ヒメビロウドカミキリ

コウチュウ目カミキリムシ科

*Acalolepta degener*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 体長 9～14mmの小型のカミキリムシである。体表に明るい茶色の短毛がびっしりと生えており、見る角度によってその光沢が変わり、まさにビロウドの名にふさわしいカミキリである。オスの触角は体長の約2倍と長い、メスでは約1.5倍とオスより短い。年に1回成虫が出現する。

**分布** 本州、四国、九州、対馬に分布する。県内では、富士山北麓及び周辺の山地草原に、少ないながら生息確認記録がある。

**生息環境** 本種が生息しているのは明るい草原で、カミキリムシとしては珍しく草原性である。近隣の東京都の多摩川河川敷には広く分布している事が知られているが、本県内では河川敷からはまだ記録されていない。また、本種の寄主植物としては、オトコヨモギ、ヨモギが知られているが、これらの植物が普通に広く分布するのに、本種の生息地は非常に限られている。

**生息状況及び危機要因** 前述の通り、本種の寄主植物は広く分布するのに、本種の記録・個体数は共に過去から非常に少ないが、近年、これらの記録地点での確認個体数が更に少なくなっている。他の絶滅危惧草原性昆虫と同様に、草原環境の保全が必要と考えられる。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 宮下泰典

# アサカミキリ

コウチュウ目カミキリムシ科

*Thyestilla gebleri*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 地色は、黒またはグレーで、体の中心（会合腺）に白のストライプが入り、まるでタキシードを着ているようなお洒落なカミキリムシである。体長は10～15mmでアザミに依存して生活している。人間が麻を普通に栽培していた頃は、麻に依って生活していたが、麻の栽培が規制され、麻が栽培されなくなったことでほとんど見られなくなり、僅かな個体がアザミやヨモギで記録されているにすぎない。

**分布** 本州、四国、九州に分布している。麻が栽培されていた頃は、全国的に見られたと考えられるが、麻の栽培が禁止されている現在では、本州以南のごく限られた場所に見られるだけである。本県における分布も麻が栽培されていた頃は広く分布していたと考えられるが、現在では、富士山北麓及び周辺の草原で確認されているのみで、個体数もあまり多くない。

**生息環境** アザミが生えているような明るい草原に生息している。牧場で発生している場所もある。それは、牛が他の植物は食べるが、アザミは棘があるため食べないためアザミだけ残る。このことがアザミだけしか生えない明るい草原の維持につながり、本種の生息環境が守られる事になっている。

## 生息状況及び危機要因

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 宮下泰典

# フタスジカタビロハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

*Brachyta bifasciata japonica*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 体長16～23mm。前胸背は黒色。鞘翅の地色は黄色で黒い斑点がある美しいカミキリである。成虫は、林間及び林縁のヤマシャクヤク類の花に集まり、その花粉や花を食べる。幼虫もこれらのヤマシャクヤク類に依存している。

**分布** 本州、四国に分布。県内においては、県北部一帯と富士山北麓に局所的に分布している。甲府盆地及びそれ以南には記録がない。

**生息環境** 温帯上部のブナ・ミズナラ等の落葉広葉樹林内が主な生息環境である。富士山北麓においては、カラマツ・シラビソ等の植林地にも生息している。また、一部の個体はベニバナヤマシャクヤクにおいても見出されている。

**生息状況及び危機要因** ホストであるヤマシャクヤク類は心ない人によって盗掘されることが多いため、すべて絶滅危惧種に指定されている。ヤマシャクヤク類が消えた所では、当然のことながら本種も生息できなくなり、個体数が激減した地域もでてきている。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 宮下泰典

# ゴホンダイコクコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科

*Copris (Copris) acutidens*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 体全体光沢のある黒色の食糞性のコガネムシの仲間である。体長10～15mmでいわゆる糞虫としては中ぐらいの大きさである。雄は頭部に1本前胸背板に4本の長く鋭い角状突起があり、まるで「ゴホンツノカブト」を小さくした風で非常に格好いい。雌はこれを欠く。

**分布** 北海道、本州、四国、九州に分布しているが、その生息地は局所的である。本県においては富士山北麓及び八ヶ岳の牧場でその生息が確認されている。

**生息環境** 幼虫、成虫ともに動物の糞に依存しており、牧場は大量の糞があるため、絶好の生息地となっている。

**生息状況及び危機要因** ダイコクコガネの項で述べたように、放牧された牧場の減少により、本種もその数を減らしているように思われる。ダイコクコガネよりも、本種の方が小型な分だけ生息できる範囲は広いようである。事実、牛糞以外の獣糞でも採集されている。しかしながら、減少傾向にあることに変わりはない。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 宮下泰典

# ヒラタクワガタ

コウチュウ目 クワガタムシ科

*Dorcus titanus pilifer*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 大型のクワガタムシで、体は黒色、やや褐色を帯びた個体もある。体長19～75mm、南方にはより大型の亜種が生息する。扁平で足が短く、樹洞に住むのに適した体つきになっている。雄の大あごに1対の内歯が、その先には複数の小さな小歯がある。幼虫は1～2年で成虫となり、成虫で越冬し2年程生きる。

**分布** 南方系のクワガタムシで、関東北部では減少するが、山形県までは採集記録がある。県内では主に韮崎市以南の低地に分布する。

**生息環境** クヌギ、ヤナギ等の樹洞や木の根元に潜み、夜樹液に集まる。幼虫は立ち枯れた、または倒木となった広葉樹腐朽木の主に下部に生息する。幼虫は、成虫までに1年または2年を要する。成虫は、越冬し2年ほど生きる。

**生息状況及び危機要因** 中部山岳地帯に位置し、高標高地域の多い山梨県での生息数は、もともと多くはないと思われる。生息地である甲府盆地内および富士川沿いの低地が開発されたことも生息環境を減少させる原因となっていると推察される。

**特記事項** 定性的要件 a) b) c)

執筆者 大澤正嗣

# ミズスマシ

コウチュウ目 ミズスマシ科

*Gyrinus japonicus*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長7.0mm、コミズスマシより大型で体の幅が広い。体は紡錘形で金属のような光沢がある。ミズスマシの仲間は複眼が上下2個ずつあり、水中と水上を同時に見る事が出来る。また、後肢より前肢が発達している。これは水面を急速に旋回し、落ちた昆虫を捕らえるのに役立つ。

**分布** 北海道、本州、四国、九州に分布するが近年減少が著しい。山梨県内では、北杜市旧須玉町、旧白州町、上野原市旧上野原町に記録を見るが、さらに広く生息している可能性が高い。だが、産地は局地的と推測される。

**生息環境** 水質の良い植物の豊富な環境に生息すると言われている。本県での生息環境は大きな溜池ではなく、樹林に囲まれた小規模の溜池や、林道わきの水溜まりのような池、湿地の僅かな開放水面などである。日照が当たる開放的な水域より半日影を好むようだ。生息地では複数の個体が水面を旋回するのを観察出来るが、産地が局所的なので会う機会は少ない。

**生息状況及び危機要因**

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 杉村健一

# カラフトホソコバネカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

*Necydalis (Necydalisca) sachalinensis*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長15～21mm。体は黒色で腹部は基部が黄褐色。前胸は微小な点刻を備え、光沢がある。上翅は黄褐色で短く、後翅は露出する。カラマツの衰弱木に飛来し、その樹液を吸汁する。幼虫は、カラマツ、トウヒ、コメツガの生木の枯死部を食する。

**分布** 本州中部山岳地帯、樺太、極東ロシア、朝鮮半島に産する。国内では、御嶽山、大井川上流での記録が多い。県内では野呂川上流で記録がある。

**生息環境** 天然カラマツの林が主な生息環境である。

**生息状況及び危機要因** 野呂川上流には現在でもわずかながら生息していると思われる。他にも天然カラマツのある亜高山帯には、生息している可能性がある。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 池田清彦

# ホソムネシラホシヒゲナガコバナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー  
なし

*Molorchus (Molorchus) ikedai*

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長 9.5 ~ 11.5mm。体は暗赤褐色から黒色。上翅は短く、後翅と腹部は露出する。亜高山帯のオオシラビソ、カラマツなどの枯死材に集まり、幼虫もそれらを食する。

**分布** 南アルプス（本州）の固有種。大井川上流の記録が多く、県内では野呂川上流や鳳凰山鳳凰小屋周辺で採集されている。

**生息環境** 亜高山帯の針葉樹林に生息する。

**生息状況及び危機要因** 一般的には稀な種だが、発生場所は人目につかないところが多いと思われ、生息環境さえ保たれれば、採集圧で個体数が減少する恐れはない。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 池田清彦

# コガムシ

コウチュウ目 ガムシ科

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー  
情報不足 (DD)

*Hydrochara affinis*

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 16 ~ 18mm、小顎髭と脚は赤褐色、後胸の棘突起が先端がとがるがやや鈍り、後基関節で終わる。ヒメガムシと似るが一回り大きい。街灯にも飛来する。

**分布** 北海道、本州、四国、九州に分布。本県では詳しい分布は分かっていないが、記録があるのは北杜市長坂町、富士吉田市、都留市、上野原市などである。

**生息環境** 八ヶ岳山麓の溜池や、富士吉田市の明見湖などで観察される。他のガムシ類と違い、水深が浅い所を好むようで、放棄水田などを探すと新産地が見つかる可能性が高い。富士吉田市の明見湖では、湖脇の水が浅く浸み出た湿地で確認された。また、街灯にも飛来するようで、上野原市の桐原のような山間部の街灯下で確認した。県内にどのように分布しているか、今後の調査が期待される。

**生息状況及び危機要因**

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 杉村健一

# クロスジウジアトキリゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー  
なし

*Lebia cruxminor*

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長6~7mmの小さなゴミムシの仲間である。全体に光沢が強く、頭部は黒色。鞘翅は赤色の地に中央に十字模様があり、小型ながら美しいゴミムシである。

**分布** 北海道、本州、九州、沖縄に分布している。県内では、富士山北麓に記録がある。他には未発表ながら旧須玉町増富で採集されているので、甲府盆地の北側にも生息していると思われる。

**生息環境** 樹上性の種がほとんどの本属の中で、本種は明るい草原に生息している。また、訪花性も知られている。

**生息状況及び危機要因** はっきりいって情報不足である。1986年の一シーズンだけ、富士山北麓鳴沢村の草地で無数の個体が群がっているのに遭遇したが、それ以降全くその姿を見ず、15年後に1頭、更に今回の調査でも1頭得られているだけである。15年に一度ということになる。ただ一ついえるのは、伐採後にできた草地にも発生する可能性があるということである。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 宮下泰典



# カワラゴミムシ

コウチュウ目 カワラゴミムシ科

*Omophron aequalis*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体は、卵形、扁平で、黄褐色～赤褐色。上翅には緑銅色の特徴的な模様が入る。前胸背板にも中央後方に同色の斑がある。光沢は強い。体長 5.5～6.5mm。脚は長く、大顎が発達する。夜行性で他の昆虫を捕食する。昼間は石、落葉、ごみや流木の下等に潜む。

**分 布** 北海道から九州まで分布している。県内では、早川町、韮崎市での報告がある。

**生息環境** 自然度の高い河川、湖沼周囲のある程度安定した砂礫地に生息する。

**生息状況及び危機要因** 河川改修等による、自然度の低下、河岸の砂礫地の減少が、生息状況を悪化させている。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 大澤正嗣

# アカアシオオアオカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科

*Chloridolum (Parachloridolum) japonicum*

2018：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 体長 25～30mm で体表は金緑色。幼虫はクスギ生木に寄生する。成虫は真夏に発生し、一般的には夜行性でクスギの樹液に集まり、灯火にも飛来するが、時には昼間、飛翔中の個体やクスギの樹液で吸汁中の個体が観察される。

**分 布** 本州以南に分布し、本州・四国・九州の一部に局地的に分布する。県内では甲府盆地を中心に個体数も多い。茅ヶ岳山麓の雑木林を中心に生息するが、県内の低山帯を調査すれば、新たな生息地が見つかると思われる。

**生息環境** 低山帯の雑木林。コナラ・クスギなどの雑木林に生息し、夜間に樹液や灯下に集まる。

**生息状況及び危機要因** オオムラサキが生息するクスギを主とした雑木林を中心に生息していて、一般的には夜行性のクワガタムシ類とともに観察されるが、近年個体数が激減しているように思える。薪炭林として利用されることがなくなったため、クスギ林の萌芽更新率が下がり、それが大きな原因になっているように思える。最近、ソーラーパネルの用地として雑木林が伐採されていることも、生息環境の悪化につながっていると考えられる。

**特記事項** 定性的要件 b)

執筆者 藤森克彦

# ハッチョウトンボ

トンボ目 トンボ科

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧IA類 (CR)

2017：環境省カテゴリー  
なし

*Nannophya pygmaea*

2005：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧IA類 (CR)

**種の解説** 腹長♂ 11～14mm、♀ 10～12mm。後翅長 13～16mm。アカトンボの仲間で、雄は成熟すると真っ赤になるが、雌は黄色地に胸部に黒色の、腹部に褐色の筋状の斑紋をもつ。わが国最小、世界でも最も小さい部類に属する。成虫は、本県では7月中旬が発生期のピークと考えられる。未熟個体もほとんど羽化水域を離れず水辺に隣接する草原あるいは灌木の間などに移って生活する。成熟しても雌はそのまま水際の草地に残るが、雄は水のある場所にもどり、植物に止まってナワバリを形成する。受精した雌は、単独で湿地の植物がある浅い水面を連続打水して産卵するという。幼虫は体長 9mm内外。

**分布** 国内では青森から鹿児島までの本州、四国、九州に分布するが、離島には産しない。県内では、白州町内に生息地が1ヶ所のみに知られている。

**生息環境** おもに平地や丘陵地、低山地の日あたりのよいモウセンゴケなどが生育する滲出水のある湿地や湿原に生息する。丘下の休耕田にも生育し、しばしば大発生するといわれるが、県内では休耕田での発生は確認されていない。

**生息状況及び危機要因** 県内から知られるこの唯一の生息地で、1932年7月24日に故榊田長氏によって発見された。ここでは、1934・36～38年に同氏によって確認されて、1937年に撮影された生態写真や標本（巻頭写真）も残されているが、その後50年程記録が途絶えていた。この情報を同氏から伺った甲州昆虫同好会は、1988年その地で調査を行い、白須英樹氏によって1♀が採集された。しかし、記録はこれが最後となり、その後2017年まで何回にもわたって調査が行われたにもかかわらず、そして、モウセンゴケが生育する湿地も残っているのに本種は再確認はされていない。すでに絶滅してしまった可能性が高いと考えられる。しかし、環境面や移動性などから絶滅と判定しにくい面が残っているため絶滅危惧IA類とした。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

# モートンイトトンボ

トンボ目 イトトンボ科

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

*Mortonagrion selenion*

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 全長約 22～32mmのイトトンボである。雄は胸部が緑色に黒い筋、腹部は、腹端部にむかうにつれて鮮やかな橙色になる。頭部の眼後紋は三ヶ月状である。雌は成熟過程で体色が橙色から緑色へと変化する。湿地や休耕田に発生し、6月頃から現れる。年1回の発生。成熟した個体も未成熟個体も同所に見られ、成熟過程での移動はほとんどないと考えられる。雌は単独で水面からでたミゾソバ等の植物組織内に産卵する。

**分布** 本州、四国、九州に分布し、北海道では絶滅したと考えられている。全国各地で減少しており、分布も局地的である。本県では北杜市旧須玉町、旧白州町に記録がある。

**生息環境** 日当たりの良い湿地や湿田、または休耕田に見られ、丈の低い植物の間を縫うように飛翔する。日が高くなると暑いのか草陰でやすむ。幼虫で越冬するので、冬でも水の残る水田でないと発生が難しい。

**生息状況及び危機要因** 県内では、県北西部の農業を使わない自然農法を行っている水田や、山間の湿地、山里の休耕田などで見られる。発生地では個体数は少ない。県内ほとんどの所が圃場整備された為、冬には水が完全に抜け、本種の幼虫が育たない水田になっている。山あいの水の抜けない昔ながらの棚田などに残っていたりするが、そういう所は休耕田になりやすく放棄される場合が多い。休耕してからしばらくは見られるが、遷移が進み乾燥してしまうと、本種は消滅する。実際この様に、消滅した産地もある。本種が発生する環境は、もともと遷移の途上の不安定な環境で、耕作という攪乱で環境を維持出来ていたのだが、稲作の近代化や山里の農地の放棄により生息地が減少した。また、本種は日当たりの良い環境を好むので、湿地が樹林に覆われ日陰になると消滅する。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 杉村健一

# マダラヤンマ

トンボ目 ヤンマ科

*Aeschna mixta soneharai*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧IB類 (EN)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 腹長♂46～50mm、♀45～49mm、後翅長♂40～46mm、♀ほぼ同大。日本に分布するルリボシヤンマ属の中で最も小さい。腹部が雄は黒地に鮮やかなルリ色の斑紋があり、♀は赤褐色の地に緑色の斑紋がある。成虫はおもに8～10月頃に発生するという。

**分布** 国内では、北海道の西南部と関東地方の一部をへて石川、長野両県にいたる本州東～北部とに分布し、その産地は局所的とされていたが、2007年に山梨県で生息地が確認され、長野県と並んで本県が分布の南限地域となっている。

**生息環境** 平地のよく開けたヨシ、ガマなどの挺水植物が群生する泥深い池沼や河川敷のたまりなどに生息し、幼虫は比較的水深の浅い藻類のよく繁茂する水域を好むという。

**生息状況及び危機要因** 2007年に甲府盆地北部の里山の池で初めて確認されたが、本種が生息する環境は県内には少なく、もともと個体数の少ない種であることや本県が分布の南限となっていることも合わせて、本種の生息が続いて確認できるか、その生息環境の動向と合わせて注目する必要がある。しかし、ネット上には、富士吉田市内で撮影したとされる写真が掲載されており、県内の南部・東部の池沼でも確認される可能性があることから絶滅危惧IB類とした。

**特記事項** 定性的要件⑤

執筆者 渡邊通人

# トラフトンボ

トンボ目 エゾトンボ科

*Epiheca marginata*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧II類 (VU)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 雄雌とも腹長34～39mm、後翅長33～38mm。名前の通り、橙褐色の地に黒斑紋様を配し、エゾトンボの仲間としては特異な色斑のトンボで、一見トンボ科のシオカラトンボのメス（別名ムギワラトンボ）に似ている。

**分布** 本州、四国、九州に分布する。西南日本では比較的多く見られるが東日本では少ない。近年全国的に数を減らしているトンボである。山梨県においては2000年に成虫が富士吉田市の明見湖で採集されたが、その後も県内では当地以外からの記録をみない。

**生息環境** 平地、丘陵地の植生豊かな池沼に生息する。明見湖では、5月下旬から6月まで成虫が見られ、オスはホバリングせずハスの咲く池の周りを飛んで、ナワバリを形成する活動が観察された。また、曇りの日でも池の周りを飛翔するのが見られた。

**生息状況及び危機要因** 明見湖は、本種の山梨県内における唯一の生息地であるが、個体数が少ない上、池の周辺は宅地化が進み、生態系のバランスの悪化が懸念される。ブラックバスの駆除と池の汚泥清掃が平成26年に行われたが、以後本種が見られなくなっているのが現状である。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 中村源太郎

# ムカシヤンマ

トンボ目 ムカシヤンマ科

*Tanypteryx pryeri*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧II類 (VU)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 腹長50mm前後、後翅長45mm前後でメスのほうがやや大きい。ジュラ紀に生息した原始ヤンマの末裔と考えられている一群で、日本特産種。複眼が体型の割に比較的に小さく、サナエトンボに似た体つきの大型トンボである。

**分布** 日本特産種で、青森県から鹿児島県まで見られるが、千葉県・長崎県及び四国では未記録である。県内では県東部の大月市と県南部の身延町で確認されただけである。両地域とも個体数は非常に少ない。

**生息環境** 低山地のコケが生え、水のしみ出すような崖に幼虫はトンネルを掘って生息する。県内で成虫が見られるのは、5～6月。大型のトンボであるわりに動きはやや鈍く、日の当たる所を好み止まっていることが多い。身延町の生息地では、橋の欄干に止まり日光浴している個体を観察した。

**生息状況及び危機要因** 発生期に見られる個体も1日に数頭と少ない。県内では水がしたり落ちるような日当たりの良いコケが生えた崖地は、林道工事や砂防工事によってコンクリートで改修されやすく、それが生息地の失われる重要な原因であるように思われる。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 中村源太郎

# ムカシトンボ

トンボ目 ムカシトンボ科

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー  
なし

*Epiophlebia superstes*

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 腹長 36～40mm、後翅長 26～30mmの均翅亜目と不均翅亜目の中間的な特徴を持つ中型のトンボである。前翅と後翅の形がほぼ同じ。黒地に黄色の斑紋があり複眼は銀白色である。体色の変化は雌雄間でも、成熟の過程でもほとんど見られない。幼虫の期間は長く5～8年と言われている。

**分布** 日本特産種で北海道、本州、四国、九州、隠岐島後、宮島、天草諸島に分布するが千葉県では未記録。本県では身延町(旧下部町)、南部町(旧富沢町)、市川三郷町(旧市川大門町)、甲州市(旧勝沼町)、北杜市(旧須玉町)、上野原市(旧上野原町)、小菅村、丹波山村等に記録があり、富士川水系、相模川水系、多摩川水系の各水系から記録が出ている。

**生息環境** 樹林に囲まれた丘陵～山地の源流に生息する。幼虫は川幅が狭く水深の浅い、流れの早い瀬の石の隙間にへばりついている。このような環境を好むので沢の本流より枝沢に、本流の場合は源流部付近で見つかる場合が多い。成虫は流れに近い林道や、流れに沿ってナワバリ占有行動をする。産卵は流れ脇の高茎草本類の組織の中に行われる。

**生息状況及び危機要因** 県内各地に広く分布していると思われる。危惧されるのは林業などの衰退で沢上の空間が、樹木により覆われてしまう事である。開放空間は餌となるカゲロウ類が飛び交う場であり、またトンボ自身が占有行動をとる場でもある。沢が閉塞すると、産卵のために必要な高茎草本類も育たなくなり発生に影響が及ぶ。治山、治水工事で建設される砂防ダムの影響も危惧されるであろう。砂防ダムと砂防ダムの間の流れある場所を選んで生息しているのを見かけることもある。産卵植物としては、カタカラコウとクリンソウが確認されている。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 杉村健一

# キトンボ

トンボ目 トンボ科

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー  
なし

*Sympetrum croceolum*

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 雌雄はほぼ同大で、腹長 24～29mm、後翅長 25～32mm。翅の基半部と翅端までの前縁が鮮やかなオレンジ色をしたやや太身のずんぐりしたアカトンボ。成虫は東海地方では6月下旬から出現して12月初め頃までみられるという。幼虫は体長 17～20mm。淡褐色の地に複雑な濃色斑がある典型的なアカネ型のヤゴ。オオキトンボに酷似しているが、明らかに小さい。

**分布** 国内では北海道、本州、四国、九州に分布している。県内では韮崎市甘利山の榎池で記録されているのみだったが、2016年に甲府盆地西部の山地帯山麓部の数ヶ所で確認されたことから、県西部の中山間地に残っている池沼に広く生息する可能性があると考えられる。

**生息環境** 主に丘陵地や低山地、岸辺に木立があって挺水植物が繁茂するような池沼や溜池などに生育する。

**生息状況及び危機要因** 周囲の県では記録があったものの、本県では1977年に韮崎市榎池で記録されるまで記録がなかった。そして1980年以降になっても記録地は同じ榎池のみであったが、近年、甲府盆地西部の山地帯山麓部の複数の池沼で確認されたことで、甲府盆地西部には個体数は多くないものの広く分布していると考えられるようになった。

**特記事項** 定性的要件②

執筆者 渡邊通人

# サラサヤンマ

トンボ目 ヤンマ科

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー  
なし

*Sarasaeschna pryeri*

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** ヤンマの中では最小の部類に入るトンボである。体長 55～60mmで翅の先が黄色くなる。体の模様はオニヤンマに似ている。

**分布** 日本固有種で、北海道、本州、九州、対馬、種子島、屋久島に分布。県内では、富士山北部で記録されている。

**生息環境** 本来の生息地は低山地の湿地で、林間の開けた空間等をヤンマ特有のバトロール飛行をする。

**生息状況及び危機要因** 県内には低山地の湿地が数えるほどしかなく、県北西部に集中している。また、標高の高い富士五湖での発生の可能性は低いと考えられる。ただし、富士宮市方面からの飛来個体が採集されている可能性はある。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 宮下泰典

# アオハダトンボ

トンボ目 カワトンボ科

*Calopteryx japonica*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 腹長♂ 41～48mm、♀ 40～45mm、後翅長♂ 31～37mm、♀ 33～40mm。体に金属緑色光沢をもつ翅の黒いカワトンボの仲間、ハグロトンボによく似ている。雌の前翅には乳白色をした偽縁紋がある。

**分布** 本州、九州に分布し、青森県から鹿児島県までみられるが、分布は局地的である。県内では、韮崎市と北杜市の峡北地方にみられるだけである。

**生息環境** 清流に生息し、成虫は5月中旬～7月までみられるが、6月に最も多い。羽化後もほとんど水域を離れず、成熟した雄は水ぎわの植物や、流れを分ける石などに静止してナワバリを持ち、雌にディスプレイをする。交尾を終えた雌は、単独で水中植物の生体組織内に産卵する。

**生息状況及び危機要因** 県内において本種の生息が確認されたのは10数年前であり、その後いくつかの地点で生息が確認されるようになった。どの生息地においても個体数は少なくないが、水量が豊かな清流域でも水の汚濁等が進んでいるので、生息地の環境の変化は見守る必要がある。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 中村源太郎

# オトラフトンボ

トンボ目 エゾトンボ科

*Eitheca bimaculata sibirica*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 体長55～63mmの中型のトンボ。腹部に黄褐色の斑紋をもち、雌雄とも翅の基部に黒褐色斑がある。水面の開けた環境を好み、雄は楕円形に回りながら縄張りを張る。雌は単独で水辺に訪れ、岸部に止まって卵塊を作ってから飛び立ち、打水産卵をする。

**分布** 北海道～甲信越にかけて分布するが、本州においては高地、しかも局地的にしか見られない。本県では八ヶ岳山麓の溜池、南アルプス前衛山地の池、甲府市北部に位置する千代田湖に記録がある。また富士五湖の山中湖でも翅だけが得られている。市町村名で表すと、北杜市の旧長坂町、旧大泉村、旧白州町と甲府市、山中湖村である。

**生息環境** 本種は北方系の種なので、やや標高の高い池で見られる。生息する水域の環境は、開放的な水面であり、ある程度の大きさも必要となる。生息する池では雄が何頭か同時に縄張りを張っているのが観察される。

**生息状況及び危機要因** 八ヶ岳山麓の溜池などでは安定して発生している。現役の農業用の溜池なので、各集落が、水量調節や草刈りなどの管理をしている。同じように県内の他の池も、ほぼ管理されているので、生息地の環境が大きく変わるおそれは少ない。最も危惧されるのは、オオクチバスやブルーギル等の外来生物の侵入で水中の生態系が変わること。本種を含めた在来種にどのような影響を及ぼすのか懸念される。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 杉村健一

# チョウトンボ

トンボ目 トンボ科

*Rhythemis fuliginosa*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

**種の解説** 体長約35mmの中型のトンボで、体色は黒色、翅は先端を除き黒で、表面には金属光沢がある。池沼に生息しており、その上をひらひらと飛翔している様子がチョウのように見える事からこの名前が付けられた。

**分布** 本州、四国、九州に分布している。本県では富士吉田地内、山中湖、韮崎市樫池に記録がある程度であったが、2010年に甲府市千代田湖で多数が確認され、それ以降周辺の甲府市から旧長坂町にかけての池沼で記録されるようになった。

**生息環境** 沼、池、ため池等止水域にみられるトンボで、他県で観察した生息地では群生していることが多かった。本県の場合、単独の記録が散在するのみであったが、富士吉田市明見湖においては、昭和30年代後半～40年代頃、たくさんのチョウトンボが飛んでいたというし(宮下泰典、未発表)、近年はまとまって確認される生息地も増えている。そして、このような生息地は人家に近い人工湖や溜め池などで、湖畔(池畔)にヨシが繁茂するところである。本種はこのような環境を好むのであろう。

**生息状況及び危機要因** 過去の記録は、単発的な記録のみであったため、遠くの生息地から移動して来た個体とみなされていたが、近年確認されている湖や溜め池では、求愛行動や交尾も確認されているので、継続して発生している場所が増えていると考えられる。ただし、現在の主な生息地は、甲府盆地から北杜市にかけての地域に散在する小さな湖と溜め池である。各生息地の環境条件の如何によっては、個体数が減少し発生しなくなる場合もあり得る。環境への配慮が必要となる。

**特記事項** 定性的要件 b)

執筆者 渡邊通人

# エゾトンボ

トンボ目 エゾトンボ科

*Somatochlora viridiaenea*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 腹長 45mm前後、後翅長 40mm前後。雌のほうがやや大きい。全身を金属緑色系の「からかね色」で装い、透明な翅をもつ。

**分布** 北海道、本州、四国、九州に分布している。寒冷種で北海道、本州東北地方及び中部山岳地域には普遍的に生息しているが関東地方以西では局地的にしか生息していない。県内でも記録は少なく北杜市（旧白州町・旧明野村）の記録があるだけである。

**生息環境** おもに寒冷な湿原で挺水植物が繁茂する滞水に生息するが、本県においてはそのような湿原はほとんどないので、山間の沼沢地や湿地が生息地として選ばれているものと思われる。

**生息状況及び危機要因** 県内においてはエゾトンボ族の好む高層湿原は極めて少なく、本種以外のエゾトンボの仲間はポピュラーなタカネトンボ以外は知られていない。発生は6月下旬から9月までと思われる。本種が生息する旧明野村では7月中旬に林間の空き地の上空を飛翔し、摂食活動をしている個体が何度か観察された。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 中村源太郎

# オオイトトンボ

トンボ目 イトトンボ科

*Paracercion sieboldii*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 雌雄ほぼ同大で腹長 15～24mm、後翅長 22～29mm。淡青色の地に黒斑のあるイトトンボ。成虫は東海地方では4月下旬から10月中旬に出現するという。幼虫は体長 16mm内外。同属の他種と非常にまぎらわしい。

**分布** 日本特産種で、北海道、本州、四国、九州に分布。県内では、甲府盆地周辺の河川や池、大月市などから記録されたが、1984年以降の確認記録はない。

**生息環境** 主に平地や丘陵地の挺水植物が繁茂する池沼や湿地の滞水、水田などで見られる。若い個体は羽化水域に隣接した岸辺の植物群落内で見られることが多く、成熟した雄は朝早くから水辺を訪れて浮葉植物の葉や沈水植物の水面に出た部分などに止まってナワバリを確保し、日中にナワバリ内で交尾する。水面付近の植物組織内へ産卵するが、しばしばオスをともなった潜水産卵がみられる。

**生息状況及び危機要因** 1979年の甲府市和田池での記録をはじめとして、1983年まで須玉町・韮崎市・大月市で記録されたが、その後の様子は不明。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 渡邊通人

# オジロサナエ

トンボ目 サナエトンボ科

*Stylogomphus suzukii*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 雄、雌ほぼ同大で腹長 30～32mm、後翅長 22～25mm。スリムな体つきをした黒字に黄色斑のある可憐なサナエトンボの仲間。和名は「尾白サナエ」で、尾部上付属器の白いことに由来している。

**分布** 日本特産種で青森県を除く本州、四国、九州に分布するが産地は限定される。県内でも産地は限定され、市川三郷町（一宮浅間神社）、甲府市（和田池）、富士河口湖町（本栖湖）、鳴沢村（軽水林道）に記録がみられるだけである。

**生息環境** 県内では低山地の溪流に見られ、本栖湖のような湖にも産する。6月から7月まで成虫が見られる。6月末に未成熟個体が林道を往復し、摂食活動をしているのを観察したことがある。

**生息状況及び危機要因** 本種が発生する渓流域は、集落が点在する山麓部である。このような場所は近年宅地化が進み、トンボが摂食やねぐらとする樹木が伐採されたり、川の汚染が進んだりして本種の発生が危ぶまれるところである。生息地の一つだった和田池、一宮浅間神社では、近年確認されていない。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 中村源太郎

# コサナエ トンボ目 サナエトンボ科

*Trigomphus melampus*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 雄、雌ほぼ同大で腹長 26～32mm、後翅長 22～28mm。寒冷地を好む止水性の小型のサナエトンボで、名前の由来も「小さいサナエ」からきている。

**分布** 日本特産種で北海道及び本州に分布している。北海道、東北、山陰では多く見られ、好寒種と考えられてきたが、最近西南日本でも発見され、その特異な分布が注目されている。隣県の長野県には多く見られるが、県内においては過去に北杜市（須玉町）における2例の記録しかなかったが、その後2007年に韮崎市の新府城付近で脱皮殻が得られている。

**生息環境** 他県においては、平地や丘陵地、山地の挺水植物が繁茂する池沼、水田、湿地などの滞水ないし止水域に生息すると言われていたが、本県でも新府城付近で脱皮殻が見つかり、やはり、そのような環境に生息しているものと思われる。

**生息状況及び危機要因** 県内において過去に数例の記録しかないが、発生期の5月半ばから7月初旬に峡北地方を丹念に調査すれば、さらに生息地が見つかる可能性が高いと思われる。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 中村源太郎

# ヤブヤンマ トンボ目ヤンマ科

*Polycanthagyna melanictera*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 腹長 80mm前後、後翅長約 55mmの大型のヤンマである。成熟した雄の体色は黄緑色、雌は黄色で、共に黒い紋をもつ。複眼、頭部前面、腹部第1節、2節の側面と下部が美しい水色である。成虫の出現期は5月下旬～9月中旬で、最盛期は7月～8月である。黄昏飛翔の習性をもつ。

**分布** 本州、四国、九州及び沖縄までの各地に広く分布する。山梨県内では、中西部、南部、富士五湖地方で少数発見されている。

**生息環境** 林の中の水たまりのような小水域が生息環境として必要である。

**生息状況及び危機要因** 山梨県内には、本種の生息に適した環境は少なく、成虫が記録されているのは、早川町、身延町、旧六郷町、甲府市及び富士河口湖町（旧河口湖町）などでの数例にすぎない。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 中村源太郎

# タガメ

カメムシ目 コオイムシ科

*Kirkaldyia deyrolli*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧 II 類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧 IA 類 (CR)

**種の解説** 体長 48～65mm。池沼・水田にすみ、よく灯火にも飛来したが、戦後の農薬大量使用によって激減した。雄は後胸に1対の嗅腺をもちバナナ臭を発して雌に自分の位置を知らせる。雌は初夏に、水中での雄の震動（3回/秒）に反応し交尾、水面より数cm上の草茎や杭などに卵塊を2～4回産み、それぞれを雄が保護する。1令幼虫から成虫まで、水生昆虫や幼魚の体液を吸って成長する。秋に羽化した新成虫は、枯葉や石の下で越冬する。

**分布** 国内では、本州・四国・九州・沖縄本島に分布。県内では甲府盆地を中心に、標高約 500 m以下の水田や池などに生息していたと考えられるが、正式な記録は旧上野原町以外ほとんどない。

**生息環境** 農薬の影響の少ない山手の池や川、そして水田のような、水の流れがあまりなく、水生植物がたくさん生えている環境に生息する。成虫は特に雌は長距離を移動することが知られ、越冬は里山の雑木林を利用するといわれているので、水辺環境・森林環境を含む広い里山環境が必要と考えられる。

**生息状況及び危機要因** 甲府在住の人の話では、昔は市街地でも人家の電球の明かりに飛来するほど普通に見られたという。第二次世界大戦直後までは、山梨県でも里地・里山を代表する水生昆虫（水生カメムシ類）であったが、餌となるメダカやドジョウをはじめとした魚類や、他の水生昆虫が減少したためか、戦後急に姿を見えなくなった。主な生息環境である水田での農薬や除草剤の使用が、その大きな原因と考えられている。道路照明が増え、そこに飛来して路面に落ち命を落とす個体が増えたが、これまた重要な原因の一つであろう。近年、県内では旧六郷町で野生の本種を確認したという情報もあり、静岡県の富士川近くの池で採集された記録（国土交通省河川水辺の国勢調査）もあることから、富士川流域の中山間地の農薬を使わない水田を含む里山環境に生き残っている可能性はあるが、非常に厳しい状況と考えられる。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

# コオイムシ

カメムシ目 コオイムシ科

*Appasus japonicus*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長 17～20mmの水生昆虫で、体は楕円形で淡褐色から黄褐色。里山の水深の浅い開放的な止水域を好み、オタマジャクシやヤゴ、小魚等を捕食する。雄は、雌によって背中に産み付けられた卵塊を保護するので「コオイ（子負い）ムシ」と呼ばれる。近縁のオオコオイムシに酷似しており、判定には総合的な判断が必要である。

**分布** 国内では、本州から九州に分布し、かつては各地の里山水辺環境に広くみられたが、近年では、一部の地域を除き激減している。県内でも、低山地から山地の里山水辺環境に広く分布していたと考えられるが、近年確認されている場所は、県北西部や東部の桂川流域など限られた場所になっている。

**生息環境** 農業用溜め池などの池沼環境を主な生息環境としている。初冬に橋の上で死体が拾得されたこともあるので、越冬地として、タガメのように雑木林を利用しているのかも知れない。近縁のオオコオイムシが標高約 1000 mまでの湖を含む水辺で広く確認されるのに対し、本種は標高約 600m 以下の低山地から低地に多く見られる。

**生息状況及び危機要因** 県内の里地・里山の溜め池を中心とした池沼に広くみられたと考えられるが、近縁のオオコオイムシと混同されることが多く、正式な記録は少ない。2000 年前半に確認された都留市の里山環境や、近年、連続して確認されている県北西部の溜め池など、甲府盆地周辺や、県東部桂川沿い等の中山間地の里山水辺環境には残っている可能性が高いと考えられる。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 渡邊通人

# ミカドミンミン(ミンミンゼミ地域個体群)

カメムシ目 セミ科

*Oncotympana maculaticollis* forma

2018：山梨県カテゴリー  
要注目地域個体群 (NLP)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
要注目地域個体群 (NLP)

**種の解説** 聞き慣れない名前であるが、実はミンミンゼミの一型である。普通のミンミンゼミの体色を見ると、黒地に緑の点々がある。それに対してミカドミンミンは、体全体が緑色になってしまうという変わった型なのである。実際には、普通の個体から、体全体が緑色の個体まで各段階の個体が入り交じって生息している。ミカドミンミンの割合が高いのは、山形県（飛鳥を含む）、宮城県、それに山梨県の甲府盆地周辺位で、全国的に見ても特異な個体群といえる。

**分布** ミンミンゼミは、北海道から対馬を含む九州までのほぼ全域に分布している。一方、ミカドミンミンは、本州中部から青森県にかけて分布するが、一部の地域で単発的に確認されているに過ぎない。本県においては、甲府盆地を中心にその周辺各地に分布している。地域毎に出現率は異なっているが、盆地からあまり離れたり、高標高になったりすると見られないようである。郡内地方や県南部では確認されていない。

**生息環境** 特異な個体群ではあるが、やはりミンミンゼミなので生息地での個体数は多く、神社、公園、林等に普通に生息している。これらが急にいなくなるという事は考えにくい、特異な遺伝子を持った個体群として注目される。この個体群への影響が大きいのは、「農薬の空中散布」であろう。

**生息状況及び危機要因**

**特記事項** 定性的要件 c)

執筆者 宮下泰典



# フジジガバチ

ハチ目 アナバチ科

*Ammophila atripes japonica*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 雌は体長 30～35mm、雄は 25～30mm。雌の体は黒色を基本として、腹部と脚の大部分が赤褐色なのが特徴で、飛んでいても本種の雌と確認出来る。雄は腹柄第2節の下半分が赤褐色であること以外は黒色なので、飛んでいる時はほとんど黒色に見える。

**分布** 松村松年が明治 20 年代、初めて富士山で採集したことにより、フジジガバチと命名された種。国内では、北海道、本州、四国、九州、沖縄に広く分布するとされるが、ある程度の広さのある草原環境に生息するため全国的に生息地が減少している。県内では富士山麓以外の記録はなかったが、今回の RDB 調査で、2015 年に富士山及び周辺山地と御坂山系の山麓部から新たに記録された。

**生息環境** 日当たりの良い草原環境を好み、スキ群落や灌木の混じった藪の中にも潜り込みカセンソウ・オミナエシなどの花で吸蜜する。雌は、草丈の低い草地の中にある、小さな礫が混じった土壌の露出する平坦地に巣をつくることが多いので、そのような環境に雌雄が集まるのが観察された。県内で生息が確認されている3地域は、いずれもキキョウやオミナエシが残っているような草原環境である。

**生息状況及び危機要因** 県内では、富士山麓でも広大な半自然草原である梨ヶ原には、ほぼ全域に分布し個体数も多くジガバチ類の中での優占種となっているが、他の半自然草原からは確実な記録はまだない。富士山周辺山地と御坂山系の山麓部では、本種の好む草原環境が維持されているので継続して発生していると考えられる。県内の低山地から山地の、キキョウやオミナエシが残っているような草原環境には、まだ生き残っている可能性がある。

**特記事項** 定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

# エゾアカヤマアリ

ハチ目 アリ科

*Formica yessensis*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長 4.5～7mm。頭部・胸部・腹柄節・脚は黄赤褐色で、腹部は黒色だが基部は少し赤味がある。枯れ草や針葉樹の落ち葉で直径1m程の塚をつくる。クロヤマアリ類に一時的な社会寄生する可能性があるといわれる種。

**分布** 北海道南西部から本州中部にかけて分布する。南限は神奈川県金時山とされる。県内では、富士山や八ヶ岳といった火山性草原を中心に分布していると考えられるが、報告された記録が少ない。

**生息環境** 標高約 1000 m以上の山地の草原が主な生息環境で、近くに林や疎林がある環境を好む。

**生息状況及び危機要因** 全国的にはコロニー数が激減しており、生息環境の大きな変化がないことから地球温暖化の影響が懸念されているが、富士山北麓の半自然草原では、現在も広くかなりの数のコロニーが確認されているので、人手のあまり加わらない半自然草原では、大きな変化は今の所ないのかも知れない。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 渡邊通人

# ニッポンハナダカバチ

ハチ目 ドロバチモドキ科

*Bembix niponica*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長 20～23mmの狩りバチの仲間で、複眼がきれいな緑色をしている。体は黒色で、腹部に水色から黄白色の波状の縞模様を持っている。集団で営巣することが知られている。

**分布** 国内では北海道から、本州、四国、九州、屋久島まで分布。県内の記録はなかったが、2015年に甲府盆地南部から記録され、以後毎年確認されている。

**生息環境** 砂質の土中に巣をつくるので、砂浜海岸や砂質の河川敷などが主な生息環境として知られているが、山梨県内では、川に近い公園の砂場が唯一の生息環境として知られる。甲府盆地の釜無川には、本種が巣をつくることが可能と考えられる環境も残っているが、まだ確認されていない。

**生息状況及び危機要因** 過去に県内の記録はなかったが、2015年に公園の砂場にハチが巣をつくって出入りしており入場制限をしているとの情報が入り、現地を調査した結果、公園の砂場や遊具の周辺の砂地に、多数の巣穴とそこへ出入りする多数の雌、その周りを飛び回る多数の雄が確認出来た。翌 2016 年も、数は少なくなっているものの同じ場所で集団営巣する多数の雌雄を確認した。ここに近い笛吹川も調査したが、本種が好む砂地環境が全くみられず、本種も確認出来なかった。この場所だけで個体群を維持できるとは思われないので、甲府盆地南部～東部の砂地のある環境に生息している可能性は高いが、生息環境が特殊なので実際の生息地は一部に限られると考えられる。

**特記事項** 定性的要件 a) b) d)

執筆者 渡邊通人

# ウマノオバチ

ハチ目 コマユバチ科

*Euurobracon yokahamae*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

**種の解説** 体長 15～24mm。メスの産卵管が極めて長く、体長の6.5～9倍に達する。これは、幼虫の宿主であるシロスジカミキリなどの幼虫が穿孔している穴に、産卵管を深くさしこんで産卵するためといわれている。体は、黄赤褐色で翅に黒っぽい斑点がある。

**分布** 本州、四国、九州に分布。本県においては、低山地に分布していると考えられるが、報告例は少ない。

**生息環境** 本種は、里山の雑木林を中心に生息するシロスジカミキリやミヤマカミキリに寄生する蜂で、雑木林や手入れされていないクリ林等を好む。

**生息状況及び危機要因** 情報不足である。確認記録の報告例が非常に少ないが、本県にはシロスジカミキリやミヤマカミキリが生息するような雑木林やクリ林等も、まだ広く見られるので、本種もそれなりに広く分布すると考えられる。今後の調査に期待したい。

**特記事項** 定性的要件 a) b) d)

執筆者 宮下泰典

# ウスリーマルハナバチ

ハチ目 ミツバチ科

*Bombus ussurensis*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

2017：環境省カテゴリー  
情報不足 (DD)

**種の解説** 体長は雌女王で 19.0～22.0mmの大型のハナバチで、色彩は女王、働きバチ、雄ともほぼ同様である。胸部背面と腹部前半の背面は黄褐色～ウグイス色の毛で覆われ、腹部後半背面の毛は黒色、各腹節後縁に灰白色の縁取りがある。社会性で1年性のコロニーをつくって5月～10月半ばまで活動し、地下に営巣するという。口吻が長く成虫は好んで筒状花を訪れるという。

**分布** 国内の分布は本州中部（群馬、長野、山梨、岐阜、富山、石川）の山地に限られる。

**生息環境** 生息地は標高 700～2000 mの山林の林縁部、高山の草地、幼～若齢の人工林、伐採後の草地などから、山村の路傍、公園緑地など幅が広い。

**生息状況及び危機要因** 個体数が少なく分布が極限されていることが指摘されており、里山の茅場から高山草原までの草地環境の変化に伴い、個体数・生息地数の減少が懸念されている。生息環境は幅広いものの、分布が極限されることから環境省のレッドリストで情報不足扱いされているので、今回のリストに掲載した。

**特記事項** 定性的要件 a) b)

執筆者 渡邊通人

# アカハネバツタ

バツタ目 バツタ科

*Celes akitanus*

2018：山梨県カテゴリー  
絶滅危惧IA類 (CR)

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧IA類 (CR)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長（翅端まで）雄 25～27mm、雌 30～40mm。ずんぐりした体型で、特に雌は太くみえる。体色は他県産は褐色とされているが、本県で確認された個体はいずれも灰黒色であった。後翅の基部が赤いのが特徴。後肢腿節の背面より内側に黒色の3帯があり、目立つ。また、これまで本種の後脛節は青いとされていたが、今回確認された個体には青いものは見られなかった。

**分布** 本州（岩手・秋田・山形・新潟・栃木・群馬・千葉・長野・石川・福井・三重の各県と東京都）に分布するとされていたが、2012年以降の記録があるのは、新潟・長野・山形の3県のみだった。2017年に初めて山梨県及び福島県で発見された。

**生息環境** 明るい林道やまばらなマツ林などの下草に生息するというが、生態はよくわかっていないとされていた。山梨県内で確認された生息環境は、草丈の低い所とやや高い所の混在する里山の草地で、生息の確認された範囲は約100m×約200mの非常に狭い範囲である。現在も記録のある新潟・長野・山形3県の生息範囲も同様の狭い範囲に局限されるという。

**生息状況及び危機要因** 本種は、1986年に新潟県で確認された以降採集記録がなかったが、2013年に長野県で、2015年に山形県で再発見された。また、2012年に新潟県でも再発見されていたことが2017年に公表された。山梨県内ではこれまで全く記録がなかったが、2017年8月11日に本種ではないかと考えられる個体が撮影されたことから、同地周辺で調査を繰り返した7回目の9月24日によりやく2頭が捕獲され、日本直翅類学会の市川顕彦氏により本種の雌と同定された。この7回の調査時に、足元から飛び立った本種の雄と思われる個体は、短い飛翔を繰り返した後草むらに潜った。写真撮影された個体と捕獲された1雌は、羽化不全の状態でも草の葉上に静止していたもので、もう1頭の雌も地表から飛び上がって草に止まった個体が捕獲された。また、それ以降も含む9回の調査で、地表を歩いていた雌や雌と思われる個体も複数目撃されていることから、本種は、飛翔があまり得意ではないのかも知れない。

**特記事項** 平成28年に環境省の種の保存法による国内希少野生動植物種に指定され、採集や標本の販売・移動等が禁止されている。定性的要件①②

執筆者 渡邊通人

# クツワムシ

バツタ目 クツワムシ科

*Mecopoda niponensis*

2018：山梨県カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
要注目種 (N)

**種の解説** 体長50～53mm、鳴く虫の中では大型種である。体色は変化に富み、緑色、淡い黄褐色のものや、赤みを帯びた褐色のものまである。成虫は8月頃から10月まで見られ、夜になると林縁の下草などで、ガチャガチャと連続的に大きく鳴き、他種と間違ふことはない。

**分布** 本州（関東より西）、四国、九州、対馬、隠岐に分布する。暖地性の種なので山地より、人里に近いところでよく見かける。県内では富士川流域の南部町（旧富沢町、旧南部町）、身延町（旧身延町）、で確認されているが、身延町大野から北では記録が無い。

**生息環境** 河川のツルヨシや、平地の植林地、雑木林の林縁の下草、民家の垣根などで見られる。本種の好む環境は、ある程度人の手により維持管理されている林の林縁で、適度な空間と下草の生えた林床を必要とする。ただし、管理され過ぎて下草が刈られると衰退することもある。

**生息状況及び危機要因** 暖地性の本種は温暖な県南部の南部町（旧富沢町、旧南部町）、身延町（旧身延町）に見られ、特に南部町では個体数も多く、民家の垣根や国道脇の林縁のクズのマントなどで鳴き声がよく聞かれる。北に位置する身延町では個体数は少なくなる。少し手入れが行き届かない不安定な林縁に良く見られるようではあるが、そこは適度な手入れの入っている場合が多い。人の生活圏から離れた奥地には見られないので、本種は典型的な人里の昆虫といえる。

**特記事項** 定性的要件b)

執筆者 杉村健一

## ヤツコバネヒナバッタ(コバネヒナバッタ 八ヶ岳亜種) バッタ目バッタ科

*Chorthippus fallax yatsuanus*

2018：山梨県カテゴリー  
要注目地域個体群 (NLP)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** 体長♂約 19mm、♀約 25 mm。高山～亜高山の草原にすみ、夏～秋に成虫となる。

**分布** 本州の八ヶ岳のみに分布する。

**生息環境** ノガリヤス類・イワヒゲ等がまばらに生育する高山荒原に生息するという。

**生息状況及び危機要因** 高山荒原に分布するというが、山梨県側の八ヶ岳は高山帯が狭く、詳細は不明。

**特記事項** 定性的要件 c)

執筆者 渡邊通人

## アカイシコバネヒナバッタ(アカイシヒナバッタ;コバネヒナバッタ 赤石山脈亜種) バッタ目バッタ科

*Chorthippus fallax akaishicus*

2018：山梨県カテゴリー  
要注目地域個体群 (NLP)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** ヤツコバネヒナバッタに似た別亜種とされる。体長♂約 16mm、♀ 23～24 mm。高山～亜高山の草原にすみ、夏～秋に成虫となり、積雪のある時期までみられるという。

**分布** 南アルプスのみに分布する。

**生息環境** ノガリヤス類・イワヒゲ等がまばらに生育する高山荒原に生息する。

**生息状況及び危機要因** 高山荒原に広く分布し、個体数も多いという。また、塩見岳山頂付近（標高 3047 m）では 100m 程度の狭い草地でも生息していたとの報告がある。北岳周辺では、小太郎山分岐周辺で記録されている。

**特記事項** 定性的要件 c)

執筆者 渡邊通人

## フジコバネヒナバッタ(コバネヒナバッタ 富士山亜種) バッタ目バッタ科

*Chorthippus fallax ssp.*

2018：山梨県カテゴリー  
要注目地域個体群 (NLP)

2017：環境省カテゴリー  
なし

2005：山梨県カテゴリー  
なし

**種の解説** ヤツコバネヒナバッタ・アカイシコバネヒナバッタと並ぶコバネヒナバッタの別亜種とされる。体長♂約 13mm、♀約 20mm。高山帯の草原にすみ。これまで長翅型は確認されていない。

**分布** 山梨県・静岡県富士山のみに分布。

**生息環境** 高山帯のイワスゲやノガリヤス類などの草本が点在する溶岩台地やスコリア地帯。一部は、雪崩により森林が消失した跡に成立するお花畑にも見られるという。山梨県側では、イワヒゲが見られるような溶岩台地上またはそれにスコリアが混ざる地域の、矮小化したカラマツ小群落やノガリヤスが混ざる狭い草地がバッタ状にみられる高山環境のみで生息が確認された。

**生息状況及び危機要因** 静岡県側の富士山で 2006 年に初めて発見され、山梨県側では 2016 年の山梨県 RDB 調査で初めて確認された。山梨県側富士山では、スコリア地帯からは見つからず、溶岩台地上の矮小化したカラマツ小群落や草地がバッタ状にみられる、標高 2600～2900 m の高山帯から見つかっている。

**特記事項** 定性的要件 c)

執筆者 渡邊通人

# ヒメケツメカ

ハエ目ケツメカ科

*Symmerus akikoe*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

2017：環境省カテゴリー  
絶滅危惧IB類 (EN)

**種の解説** 体長 3.8mm、翅長 4.5mm。胸部は一様に黄褐色で、雄の左右の複眼は触角の背側で広く接しているのが特徴。山梨県北杜市（現）須玉町（旧）増富村金山の原生林で確認された1オスに基づいて記載されたが、その後の調査でも全く記録されていないという。日本固有種。

**分布** 本州の山梨県から知られているのみ。

**生息環境** 確認されたのは落葉広葉樹の自然林で、近似種の生態から推測して、幼虫は朽木に穿孔してこれを食すと考えられているが、詳細は不明。

**生息状況及び危機要因** 確認された記録が1オスのみであり。確認された落葉広葉樹の自然林の周囲がカラマツ植林地となり、自然林の面積が狭くなっているため、絶滅に近いと判断されている。また、キノコバエ類の進化を考える上でも重要な種とされている。

**特記事項** 定性的要件 a) b) c)

執筆者 渡邊通人

# タカネキアシナガレアシナガバエ

ハエ目 アシナガバエ科

*Diostracus nakanishii*

2018：山梨県カテゴリー  
情報不足 (DD)

2005：山梨県カテゴリー  
なし

2017：環境省カテゴリー  
準絶滅危惧 (NT)

**種の解説** 本州長野県仙丈岳の高山帯下部で確認された1オスに基づいて記載された種で、その後飛騨山脈の高山帯で1頭が確認されているという。日本固有種。

**分布** 南アルプス仙丈岳と飛騨山脈の2ヶ所が知られるのみ。

**生息環境** ナガレアシナガバエ属としては例外的に高山帯に生息する種で、源流域の小さな流れを生息地としているという。

**生息状況及び危機要因** 仙丈岳の記録は、長野県側で1963年7月21日に記録されたものが唯一あるだけだが、源流域の小さな流れを生息地としているといわれているので、仙丈岳の山梨県側大仙丈沢・小仙丈沢の源流域にも生息している可能性があると考え、今回の山梨県RDB改定版に掲載することとした。

**特記事項** 定性的要件 a) b) c) d)

執筆者 渡邊通人

## 昆虫類調査員（五十音順敬称略）

秋山隆・岩崎央・大澤正嗣・杉村健一・瀬田實・外川徳男・外川倍美・中村源太郎・早見正一・福澤卓也・藤森克彦・宮崎泰雄・宮下泰典・山本俊一・渡邊通人

## 昆虫類協力者（五十音順敬称略）

市川顕彦（日本直翅類学会）、伊藤ふくお（日本直翅学会）、猪又敏男、大野正男（全般 東洋大学名誉教授）、環境省生物多様性センター、環境省富士五湖自然保護官事務所、岸田泰則（チョウ目ガ類 日本蛾類学会会長）

## 昆虫類参考文献一覧

- 朝比奈正二郎ほか. 1988. 原色昆虫大図鑑 Ⅲ 蜻蛉・直翅・半翅・膜翅他編. 北隆館.
- 浜田康・井上靖. 1985. 日本産トンボ大図鑑. 講談社.
- 林 匡夫ほか. 1984. 原色日本甲虫図鑑 (Ⅳ). 保育社.
- 広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則編. 2011. 日本産蛾類標準図鑑 (Ⅲ). 学研.
- 堀 勝彦. 1993. 信州の自然誌「高山チョウ」. 信濃毎日新聞社.
- 福田晴夫ほか. 1972. 原色日本昆虫生態図鑑 Ⅲチョウ編. 白水隆監修. 保育社.
- 福田晴夫ほか. 1982. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅰ) アゲハチョウ・シロチョウ科編. 保育社.
- 福田晴夫ほか. 1983. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅱ) タテハチョウ・テングチョウ科編. 保育社.
- 福田晴夫ほか. 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅲ) シジミチョウ科編. 保育社.
- 福田晴夫ほか. 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅳ) ジャノメチョウ・セセリチョウ科編. 保育社.
- 猪又敏男. 1990. 原色蝶類検索図鑑. 北隆館.
- 井上寛ほか. 1982. 日本産蛾類図鑑. 講談社.
- 石田昇三. 1969. 原色日本昆虫生態図鑑 Ⅱ トンボ編. 保育社.
- 石田昇三ほか. 1988. 日本産トンボ幼虫・成虫検索図説. 東海大学出版会.
- 石井実 (監). 2010. 日本の昆虫の衰亡と保護. 北隆館.
- 伊藤修一郎・奥谷禎一・日浦勇編著. 1977. 原色日本昆虫図鑑 下. 保育社.
- 環境省. 2002. 生物多様性調査 動物調査報告書 (昆虫 (トンボ類)).
- 川副昭人・若林守男著. 1976. 原色日本蝶類図鑑. 白水隆監修. 保育社.
- 岸田泰則編. 2011. 日本産蛾類標準図鑑 (Ⅰ). 学研.
- 岸田泰則編. 2011. 日本産蛾類標準図鑑 (Ⅱ). 学研.
- 清沢晴親ほか. 1981. 図説長野県のカミキリムシ. 日本民族資料館.
- 小島圭三・林匡夫. 1969. 原色日本昆虫生態図鑑 Ⅰ カミキリ編. 保育社.
- 甲州昆虫同好会. 1976～2016. 山梨の昆虫 (甲州昆虫同好会会誌) No. 1～No. 5 6
- 甲州昆虫同好会. 1985. 山梨の蝶. 山梨日日新聞社.
- 甲州昆虫同好会. 1995. 山梨の蝶 改訂版. 山梨日日新聞社.
- 甲州昆虫同好会. 1998. すばらしき山梨の虫たち. 山梨日日新聞社.
- 村井貴史・伊藤ふくお. 2011. バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑. 日本直翅類学会監修. 北海道大学出版会.
- 中根猛彦・大林一夫・野村鎮・黒沢良彦. 1975. 原色昆虫大図鑑 Ⅱ 甲虫編. 北隆館.
- 日本甲虫学会編. 1976. 原色日本昆虫図鑑 上 増補改訂版. 中根猛彦監修・保育社.
- 日本産アリ類データベースグループ. 2003. 日本産アリ類全種図鑑. 学習研究社.
- 日本鞘翅目学会. 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社.
- 日本直翅類学会編. 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 町田龍一郎監修. 学研.
- 日本チョウ類保全協会編. 2012. フィールドガイド 日本のチョウ. 誠文堂新光社.
- 間野隆裕・藤井恒編. 2009. 日本産チョウ類の衰亡と保護 第6集. 日本鱗翅学会.
- 志村 隆編. 2003. 日本産アリ類全種図鑑. 学研.
- 白水隆. 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学研.
- 静岡昆虫同好会. 1953～2017. 駿河の昆虫 (静岡昆虫同好会会誌) No. 1～No. 2 5 8
- 杉村光俊ほか. 1999. 原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑. 北海道大学図書刊行会.
- 田中義弘. 2012. 狩り蜂生態図鑑. 全国農村教育協会.
- 鷲谷いづみ・矢原徹一. 1996. 保全生態学入門. 文一総合出版.
- 矢田脩 (監). 2007. 新訂原色昆虫大図鑑 第Ⅰ巻 (蝶・蛾篇). 北隆館.
- 矢後勝也・平井規央・神保宇嗣編. 2016. 日本産チョウ類の衰亡と保護 第7集. 日本鱗翅学会.
- 矢島稔・佐藤有恒. 1984. フィールド図鑑 昆虫. 東海大学出版会.
- 「月刊むし」(むし社) No. 1～
- 「昆虫と自然」(ニューサイエンス社) No. 1～